

ヘレナ・ノーバーグ・ホッジ Helena Norberg-Hodge ●
スウェーデン生まれの言語学者、環境活動家。
1975年に、それまで閉ざされていたインド最北部ラダック地方に入り、
ラダック語・英語辞書を作成。
ISEC (エコロジーと文化のための国際協会・本部イギリス) の代表。
86年、ライト・ライブラリフッド賞を受賞。
ラダックでの活動を継続しながら、国際的なネットワークを通じて、
グローバル化への批判、ローカルで持続可能な経済への
転換のための啓発活動を展開中。
著書「ラダック 懐かしい未来」(山と溪谷社)は40か国語に訳されている。

とても苛酷な気候と乏しい資源
にもかかわらず、ラダックの人び
とは単に生存するという以上の
暮らしを楽しんでいる。……そ
れぞれの仕事を成し遂げるのに、
ほんの簡単な道具だけを使い、と
ても多くの時間をかける。……に
もかわらず、ラダックの人たち
は、あり余る時間のゆとりを持っ
ている。彼らは穏やかなペースで
働き、驚くほど余暇の時間を享受
している。

……ラダックの人たちは、時間
を描写する多くの美しい言葉を持
っている。……「ゴンロット」は、
「暗くなってから就寝まで」の時
間……「ニーツエ」は、文字どお
りには「山頂にかかる太陽」……
「チベチリット」は「鳥の歌」を
意味し、朝日が昇る前に鳥がさえ
ずる時間を指している。
収穫の時期、作業がながくつづ
くときでも、のんびりとしたペー
スで行われ、80歳の人でも小さな
子どもでも参加し手伝うことがで
きる。よく働くが、笑いと歌がと



もなったそれぞれのペースで働く
のである。仕事と遊びのあいだに
は、はっきりとした区別がない。
（「ラダック 懐かしい未来」 50
頁より引用）

美しい時間

辻信一（以下T） 「ラダック
懐かしい未来」という本の中で、
ばくにとつて特に印象的だったの
はヒマラヤの高地に住む伝統的な
ラダック人たちが持っていたスロ
ーな時間の感覚と、彼らの楽しげ
な仕事ぶりについての描写です。

しかしそれらが、急激な開発の波
を受けて、変化し、崩れてゆく。
そのプロセスをあなたは見事に描
いてくれました。
ヘレナ・ノーバーグ・ホッジ（以
下H） ラダック文化の中の時間
との出会いは、1970年代に最
初に訪ねた頃の私にとって衝撃的
でした。それは私がそれまで知っ
ていた近代的な西欧の時間とは、
まるで「白と黒」みたいにちがう
ものだったんです。まず、ラダッ
クの人々の間には時間からくるブ
レッシングというものが全く存在
しなかった。こんなに悠々と時間
を過ごしている人々というものを
私は見たことがなかった。そこ
には、時間が商品価値を持つなど
という観念がないのはもちろん、時
間が問題だと感じられることさえ
なかった。人々は働き者なんです
が、その仕事ぶりはゆったりと余
裕に満ちていて、忙しいはずの収
穫期でさえ、誰も急いだり、急か
したり、慌てたり、イライラし
たりしない。そしてどんな時にも楽
しむことを忘れない。
T 仕事と楽しみが分離していな
い。一方、現代社会の特徴は、仕
事は仕事、娯楽は娯楽という区別
を明確にすることです。
H そう、確かにラダックではか
つて仕事の時間の中にいつも歌が
あり、笑いがあり、祝いがあり、
祈りがありました。
T 時間が問題として意識されな

い、というところが大事だと思っ
たんです。逆にぼくたちの世界には
ありとあらゆる問題があるけれど、
そのすべての問題が時間と絡み合
っていて、「時間がない」とか「時
間が足りない」ということがそれ
ら諸々の問題をひき起こす要因に
なっている。
H 西洋では、その「時間がない」
という観念から出発して「時間の
節約」を最重要のテーマとしてき
たわけです。そしてテクノロジーに
よって時間を節約することで、
つらい仕事から自分自身を解放し、
のんびりとした時間を獲得しよう
と。でもこれがまさに異なったわ
けです。時間の節約によって時間
を得るといふこの考え方によって、
私たちは逆にますますのんびりと
した時間を失っていった。皮肉で
すね。

Dialogue Slow is Beautiful

Vol. 49

懐かしい未来の スローな私。 ラダックから 豊かさを問い直す

Guest

ヘレナ・ノーバーグ・ホッジ

Helena Norberg-Hodge

文・写真 ● 辻 信一



T 「開発」というのは、そういった時間を節約するためのテクノロジーを「遅れた国々」にもち込むことを意味したわけです。

H そう、例えばラダックでは、車道をつくり車を走らせることで、A地点からB地点に行くのに、馬で行くの比で10倍、歩くの比で50倍も早く行けることになった。同様に電話が入り、様々な農業機械も入って、それらは確かに個々の仕事のペースを早めることになった。しかし、時間の節約になったかといえそうではなく、人々は導入された機械のペースに合わせることを強いられるようになり、時間によるプレッシャーを初めて経験するようになった。

歩いていたのではもう仕事にならない、という状況が生じたんです。機械類がその社会のあたり前の存在になり、それらがなかった頃の生活のリズムは通用しなくなる。つまり、かつての悠然とした仕事のペースはそれだけで「反社会的」になる。そうして「時間の節約」というコンセプトが完成する。

H そう、その時、時間は初めて「商品」となったわけです。

T 時は金なり、ですね。

H こうした時間についての考え方の大きな変化は、人生そのものの見方を変えてしまいました。それまでの伝統的な社会では、長い時間をかけて培われた技術や知恵を、それぞれの世代の人々がこれまた長い学びの時間を経て身につけていった。そういう社会では、歳をとってゆくことは決して否定的なことではなく、むしろ知恵や技の蓄積という重要な意味を持っていたわけです。

持っていたわけですね。

T 多くの伝統社会で年寄りを敬うということが強調されるのも、これと深い関係にあるでしょうね。

H ところが、開発の名の下に新しい近代的なテクノロジーが外から導入されると、若者たちは素早く適応して、それを器用に使いこなすことによって社会の中での地位を高めていく。逆に年齢が高いものほど、なかなか適応できず、その分、社会的な地位は下がってゆく。老いが次第に否定的なものになり、老人はお荷物と見なされ、また本人もまた厄介者であると感じるようになってしまっています。

T それは老いすることへの恐れにつながる。思えば、時間の経過そのものが否定的な意味を帯びてしまっているのは悲惨なことですね。

H 開発とかテクノロジーの進歩とかを無邪気に推し進めることによって、実は、私たちは大変な怪物を自分たちの内部に育てていた、ということなんではしうね。

スローは

自然と人間の調和

H 伝統社会でのスローなペースをもう一度、学び直すべきです。というのは、人間が生きていく上でもっとも重要な活動に、そのペースが向いていたからです。まず、衣食住を確保するというのは、つまり、水や土や太陽のリズムに合わせて、動植物のペースと、どうつき合い、どう折り合いをつけるかということです。多くの伝統社会はとも賢いやり方でそれを行っていた。星の運行を読み、宇宙のリズムに自らを合わせることできた。その表現がそれぞれの地域が持つ持っていた層です。

近代化は確実に人間をその自然界のリズムから分離して、ますます我々を宇宙の中で「調子はずれ」な存在にさせてしまった。

T 自然との調和した関係を保つという文化的な能力は本当に衰弱してしまっただけ。環境問題とはまさにこのことですね。でも、こういうことを言うのと、「じゃ、過去へ戻れ」と言うのか」という反応が返ってくる。

H 過去になんてもう戻りたくても戻れるものじゃない。でも過去の世界にいい要素があったことを認められればそれでいいんです。第一、過去の人々が我々より幸せだったかもしれない。より健全だったかもしれない。そして自然界とのもっといい関係を保つことを知っていたらしい。そうだとしたら、「あれ、それってどうしてなのかな？」と考えてみるのが当然でしょ。そう考えることさえ拒否するのは馬鹿げています。

T 「過去に戻れ」と言うのか」と言う人たちは、過去というものに対する何か大きな恐れを抱いているようですね。

私にできること

ハチドリ通信

日本で「懐かしい未来」、
つくりませんか？

食と農において、経済グローバル化を推進するのではなく、逆にローカル化を進めることが、実は本当に幸せで持続可能な社会を取り戻していくための鍵となる。そのことを分かりやすく、力強く説いた、ヘレナさんの新しいメッセージブックが出た。「食と農から暮らしを変える、社会を変える：行動のためのヒント集」(日本語版作成：NPO法人開発と未来工房 2006年 500円)。「懐かしい未来ネットワーク」は、こうしたヘレナさんのメッセージを日本の多くの人に伝えとともに、日本で「懐かしい未来」を創り出していくための活動を行っている。詳しくは、ウェブサイト。「懐かしい未来ネットワーク」(代表：鎌田陽司)

<http://www.afutures.net>



在的にある人間らしさへの欲求からきているのだと思う。それは本質的な欲求だから、押しとどめることはできません。自然でオーガニックな食べもの、住まい、衣服への欲求はどんなに近代的な場所でも湧き起こっている。

T それは、そのほうが正しいからじゃない、そのほうが、幸せ度と持続可能性が高いから。「懐かしい未来」ってそういう意味でしょうね。

H そうです。過去であろうと未来であろうと、もっと賢く、スロイで、優しい人と人とのつながり、人間界と自然界との関係のほうが、持続可能性が高いことは明らかです。

T そしてそこに住む人はもっと幸せ——つまり、GNH度が高い。

H それは基本的な人間のニーズに、そのスローなペースが合っているから当然なんです。妊娠、出産、子育て、家庭、コミュニティの助け合い、年寄りの世話。みなゆつくりとしたリズムを必要とするものばかりなんです。



つじ・しんいち●1952年東京生まれ。
〈スロー〉というコンセプトを軸に日本、エクアドル、ミャンマーなどで環境＝文化運動を展開中。
1999年、ナマケモノという動物にこそ人類存続のヒントがあると「ナマケモノ倶楽部」を設立。
明治学院大学国際学部教授。
著書に「スロー・イズ・ビューティフル」(平凡社)、「スローライフ100のキーワード」(弘文堂)、「スロー・快楽主義宣言」(集英社)、「スロービジネス」(共著、ゆつくり堂)など。
最新刊は「ハチドリのはつとずく——いま、私にできること」(監修、光文社)。